

氏 名 Chu Xuan Giao

学位(専攻分野) 博士(文学)

学位記番号 総研大乙第242号

学位授与の日付 平成27年9月28日

学位授与の要件 学位規則第6条第2項該当

学位論文題目 ベトナムにおける市場経済化の進展と地域文化の生成
—東北地方のヌン・アン集団の事例から—

論文審査委員 主 査 准教授 檜永 真佐夫
教授 塚田 誠之
教授 横山 廣子
教授 中西 裕二 日本女子大学
客員研究員 末成 道男 東洋大学
名誉教授 田村 克己 総合研究大学院大学

論文内容の要旨
Summary of thesis contents

1. 研究目的

本論文の目的は、ドイモイ（刷新）とよばれるベトナムの市場経済化以降、東北部山間地に居住する少数民族ヌン族の下位集団、ヌン・アンの社会と文化の変化を現地調査に基づき記述し、ヌン・アンにとってのドイモイの意味を明らかにすることである。

ベトナムでは1986年にドイモイ路線が採択された。国家管理のもとで、という制限があるとはいえ、従来の中央集権的経済システムを否定し、地方分権的な市場経済システムへの移行を目指す抜本的な経済改革の断行であった。その後、改革は経済以外の分野にも波及し、文化政策の変革にも着手された。

政府主導の開放政策下で市場経済化と国際化が進んだばかりではない。国家や地方自治体ではなく、地方住民自体が個別に経済的利益を求めることが可能になり、地域社会も大きく変貌した。たとえば、半世紀近くにわたる社会主義体制下で、封建主義的、非科学的などとして政府の批判を受け断絶させられていた伝統文化が、次々と復活した。さらに21世紀に入ると、こうした地方において復活した伝統文化と経済活動の関係は、新しい局面を迎えるようになった。即ち、経済発展を優先して文化政策を後回しにする20世紀的な政策、そして官僚制的な「中央から地方へ」という政策のあり方が崩れたのである。つまり「経済から文化へ」、さらに「中央から地方へ」に対する「文化から経済へ」、「地方から中央へ」という逆の動きが生じた。その要因として地域住民が地方における文化活動の主体となったことが挙げられる。このことは、彼らの社会に対する発言力の増大にもつながった。

従来のベトナム民族学において主流であった「経済から文化へ」、「中央から地方へ」の方向に沿った地域文化の記述にならうのではなく、本論文では「文化から経済へ」、「地方から中央へ」という逆方向の経済と文化の動きが、ヌン・アンという地域住民の日常的な社会文化的行為のミクロな実態から解明された。これまでのベトナム民族学ではほとんど問題視されなかった「地域住民＝少数民族にとってのドイモイ」を明らかにし、またこれにより、彼らのアイデンティティの動態を示した。

本論文はミクロな村落調査に基づき、ドイモイ政策下で少数民族による地域社会が、さまざまな文化活動と経済活動を通じて主体的に再構築されている実態を明らかにした。くわえて本論文はベトナムの「少数民族にとってのドイモイ」という問題を文化人類学の「文化の客体化」という視点から検討を行った。

2. 論文の構成

本論文の対象、目的、方法を記した「序章」に、本論を構成する「第一章 ベトナムのヌン族、ヌン・アン集団」、「第二章 ドイモイ下のヌン・アン」、「第三章 ドイモイの新展開下のヌン・アン」の3章が続き、「終章」で全体の議論を総括した。

本論文はカオバン省クアンウェン県フクセン社における現地調査で得たデータを中心に構成され、当該地方の住民はすべてヌン・アンを自称している。第一章では、本論文の対象となる地域住民が、自分たちの来歴、祖先との関係、ベトナムにおける地位などから、自分たちのアイデンティティをどのように表明しているのかを示した。

第二章では、1990年代のフクセン社の社会と経済に対するドイモイの影響を検討した。ここで明らかにしたのは、農業集団経営から家族自主経営へと転換する中、現地ヌン・アンの人々がどのように国が決定した政策を活用しながら市場経済導入の基盤を自力で築き、経済の活性化に成果をあげたかという点である。さらにもう一つは、ドイモイ以前に一度

(別紙様式 2)
(Separate Form 2)

は否定された宗教職能者タオによる儀礼や漢字継承が復活することで、それらがヌン・アンの伝統としてどのように再確認され、ヌン・アンのアイデンティティーが再構築されていったかという点である。

ドイモイ以降前半期ともいえるこの時期、本格的なグローバリゼーションの影響が及ばない中で、フクセン社の人々はベトナム政府が目指す「先進的で民族色の濃い文化」としてのヌン・アン文化を再発見して構築し、自らをヌン族としてではなくヌン・アンとして誇り高く語る基盤を築いたのである。

第三章では、ドイモイ以降後半期にあたる21世紀を扱っている。2005年頃からヨーロッパ諸国のNGOによる開発援助やメコン地域開発のプロジェクトが始動したことを契機として、ヌン・アンの地域社会に新たな変化が生じはじめた。「観光村」とよばれる新タイプの村落の出現や地元の資源を生かした「新合作社」が設立されたのである。このようにグローバリゼーションの拡大と市場経済化の浸透が一層深まる中で、ヌン・アンの人々の間では、ドイモイ直後に「成功した」と見られていた「先進的で民族色の濃い文化」を見直す必要があると問われるようになった。すなわちドイモイ政策の新展開のなかで「民族色の濃い文化」をどのように維持するのかという問題が表れ、そのための対策が模索されるようになったのである。本章では、ヌン・アンの人々がこの新たな課題にいかに取り組んでいるのかについて検討した。

以上の検討の上に、終章では「ヌン・アン社会にとってはドイモイとは何か」という観点から本論の議論を総括した。

3. 研究の意義

「少数民族にとって、ドイモイとはなにか」という問いに対して、本論文は次の四点からの回答を試みた。

第一に、ドイモイによりフクセン社の人々は、経済活動における主体性を獲得した。家族自主経営と市場経済への参入の経験を生かし、伝統文化を復興させ、必要に応じて自らの意志で習慣も変化させる、いわば文化的主体性をも彼らは獲得した。その際、彼らが強く表明するのは、ヌン族としてではなく、ヌン・アンとしてのアイデンティティーである。

第二に、従来のベトナム民族学におけるドイモイによる社会文化的変化に関する考察には、地域社会の生活に根ざした、いわば「下から」の視点が極めて乏しかった。経済史学者らは、主要民族であるキン族地域で1979年以降、後のドイモイに結びつく大胆な「地方実験」をすでに記述しているが、ヌン・アン社会のような少数民族における「地方実験」の実態の報告はない。したがって、ドイモイ以前から以降に亘る地域住民の経済・文化活動について、「上から」と「下から」の双方に注目しつつ分析した本論文は、ドイモイ路線の形成過程というテーマについても貢献をなす。

第三に、経済面からいえば、ドイモイとは社会主義経済の基本原則である「中央計画経済」「集団的経営」を放棄し、「私有財産制」「利潤追求」を大幅に取り入れ「経済の資本主義化」を実現するための改革政策である。しかしその一方、文化面からいえば、今日の地域社会の慣習や儀礼にも社会主義時代の「集団的経営」による変革の影響が残っている。それらがドイモイ以降に排除されることなく、それらも含めた地域文化が今日では現地の「伝統」と見なされ、人々に維持されている実態を本論文では明らかにした。

第四に、以上の三点から見てきた次のような国家と地方の関係が、ヌン・アンにとってドイモイの意味として重要である。ヌン・アンは、従来の国家と少数民族の地域社会との関係秩序において「ベトナム—ヌン族—ヌン・アン」の最下層に固定され、「ヌン族」と

(別紙様式 2)
(Separate Form 2)

いう中間項が不可欠であった。しかしドイモイ以降、ヌン族を抜きにヌン・アンは国家に対し主体的に働きかけるようになったのである。1950年代から1980年代までの民族識別工作を通じて創出された、ヌン族をはじめとする「民族」カテゴリー自体についても、本論文は再考を促している。

さらに、ドイモイ以降にヌン・アン社会に誕生した「文化村」と「観光村」といった実践から「文化の客体化」理論を参照し、ドイモイとは何かという問いを文化人類学の文脈で再検討した。したがって本研究から見ると、「文化の客体化」は「文化村」の建設、「文化村」の創成などの一連の試みを通じて、生成され続けてきた現象である。ドイモイによってまさしくこうした一連の持続的な「文化の客体化」が実現されたのである。

本論文は、ベトナムを構成する 54 民族の一つ、ヌン族の下位集団ヌン・アンに関する民族誌である。東北地方のカオバン省クアンウェン県フクセン社地域における、1990 年代以来の現地調査の成果と文献資料の分析に基づき、現地ヌン・アンの人々が、フランスによる植民地支配（～1945）、ホー・チ・ミンによる「八月革命」（1945）以降の社会主義的集団化、そして特にドイモイ路線の採択（1986）による市場経済化、という劇的な社会変革期を経て、自文化をどのように継承してきたかを精緻に記述している。

ヌン・アンの人々にとってのドイモイの意味を解明することを中心テーマとしている本論文は、対象・テーマ・研究史を概説する序章、本論（第 1～3 章）、本論の議論を総括する終章の、全 5 章によって構成されている。

第 1 章では、ヌン・アンとしてのアイデンティティの根本にある、祖先が中国広西の隆安県から断続的に移住してきたという伝承を、言語学による成果を参照したうえで、系譜文書や墓碑銘など現地漢文資料に基づく独自の検討により裏付ける。第 2 章では、親族関係、村の社会組織、婚姻と葬式、農業および地域の特徴的な生業である鍛冶業、共同体儀礼などヌン・アンが居住する地域の生活と文化の実態を、過去一世紀の歴史的变化、とりわけドイモイによる変化に注目して描き出す。第 3 章では、フクセン社の鍛冶製品が全国的に有名になり、また観光開発が進んでいる近年、グローバル化の影響を受けて住民たちが新たな文化的生活を構築しようとするなかにあって、かつて社会主義的集団化の時期に迷信異端や封建的遺習として批判され、共産党の指示によって一旦は禁止された伝統が、どのように復活し、また新たにどのような文化創造の動きが生じているかを示す。ここでとくに詳述されるのは、宗教的職能者タオによる儀礼、漢字、民族衣装、「フォン」という歌掛けの継承に関してである。

以上を総括し、終章では次のように結論する。ヌン・アンにとってドイモイとは、地域の経済・文化活動における主体性を獲得し、ヌン族としてではなくヌン・アンとしてのアイデンティティを強く意識する契機であった。つまりドイモイはヌン・アン自身にヌン・アン文化を再発見させたのである。

本論文は特に次の点で学術的意義が認められる。

1) ヌン・アンはヌン族というタイ系民族の一下位集団として分類され、ヌン族のなかで文化的に独特な集団であることが研究者らに認識されていたにもかかわらず、その文化に関する報告は断片的なものに限られていた。本論文は、ヌン・アンに焦点を絞ってその社会と文化の特徴を示し、人々が自文化をどのように自己認識しているのかをはじめて明らかにした。

2) ドイモイが少数民族の文化に与えた影響を論じた文化人類学者による研究は、これまでもある。しかしその多くは、ベトナム政府に民族として認定されている比較的人口規模の大きな集団単位を対象とし、またその文化が中央やグローバル化による影響を受けてどのように変化したかというレベルの議論に留まり、地域住民の目線やその主体的な動きは軽視されがちであった。これに対して本論文は、20 年近くにわたって現地社会の変化を見続けることで、ヌン・アンの人々の視点からの文化の厚い記述に成功している。

3) 人生儀礼や共同体儀礼における父系親族集団の役割、結婚してから妻が初生児懐妊まで夫と居住しない「不落夫家」の婚姻習俗の衰退、「トン」という擬制的親族の関係性を示す民俗概念の意味の拡大や曖昧化など、ヌン・アンの家族・親族関係の現代的特徴を、西

(別紙様式 3)

(Separate Form 3)

南中国の壮族、ベトナムのタイ族、タイのミエン族などとも比較して明らかにしている。これらは民族誌的に重要なだけでなく、ベトナムの地域社会における人間関係のあり方の変化を探る上でも貴重な資料である。

4) ドイモイ以降の経済発展と先進各国 NGO のグローバルな活動の影響に対する現地の人々の対応のミクロな実態を、衛生観念の変化のプロセスをめぐる記述など、住民の生活の場からすくい上げた言説と行動を通して実証的に描出している。

5) 従来、ベトナムの文化史的研究ではドイモイ以降をひとくくりに時期区分するのが一般的であったが、本論文では、2000年頃を境にドイモイ期を二つに分け、ドイモイ後の変化のあり方の違いを指摘している。それにより、ベトナムのみならず、市場経済化とグローバル化の進展によって社会と文化の変化が著しい他の社会主義国とも比較可能な新しい捉え方を示している。

本論文は地域研究に大いに資するすぐれた成果であるが、課題も残る。ヌン・アン文化の長期にわたる変化を追っているがために、たとえば社会主義的集団化時代における宗教的職能者の組織や活動の実態、ドイモイ以降の通婚圏の拡大がもたらす家族・親族関係への影響など、個別の文化事象に関しては、細部が記述し尽くされていないと思われる箇所がある点である。しかし、それらは本論文で提示された枠組みとの関連から、今後深化させるべき個別のテーマとして考えられるものである。

以上により、審査委員会は全員一致で本論文を学位授与に十分に値すると判断した。